

コメントと総合討論

ネオリベリズムの主体と社会の危機

檜村 愛子

報告者の方々の問題意識の共通点として、ネオリベリズムをより広い射程で分析していくための「ネオリベラル化」という概念の使用、経路依存性や実践、ハイブリッド化、個別性などの観点——これは特に平井さんですが——、そして開発主義国家としての日本の独自のケースを考えていこうという観点があったと思われ、そのために現場としての「都市」を視点とする点、興味深くお聞きしました。ネオリベリズムという概念は、当初は現実を分析する理論的発見性を持っていましたが、今日の皆さんの個別の分析のように、むしろ個々の分析のなかから見えてくるものの方が重要になってきていると思います。

まず、ネオリベリズムの類型と理論的変遷の紹介と意味については、丸山さんが先行研究を詳しく追われていましたが、2000年代および今をどう捉えるかというところを、もう少しお聞きしたかったと思います。

上野さんのご報告は、ネオリベリズムにとって重要な金融の問題に焦点を当てて具体的な分析をされたものでとても面白かったのですが、これまで上野さんがなされてきた、たとえば「東京都の「世界都市」化戦略と政治改革」といった論文で書かれているような分析との接点や関係についても教えていただければと思いました。「開発主義国家」型都市の「ネオリベラル化」という議論の欠点を超えるものとして、「ネオリベラル化する都市」論に着目するというのは、今日のメンバーで基本的に見解を一にしていると思いますし、特に日本の固有性を分析するための枠組みでもあったと思います。すなわち上野さんも指摘されるように、日本では、強い経済規制と公共事業によって完全雇用と所得再分配を達成するメカニズムが形成され、それが欧州的な福祉国家の機能を代替する補償メカニズムの役割を担い、欧米諸都市のネオリベラル化が国家・自治体の担ってきた階層間再分配システムの創造的破壊をもたらしたとするならば、日本および東京のネオリベラル化は開発主義国家の域間・産業間の再分配システムの創造的破壊であるというものでした。

植田さんの議論については、空間を越境していくeコマースのようなメディア空間をどう考えられるか聞いてみたいと思います。現在、百貨店の衰退があり、さらにはモールも今や危ないと言われていています。もちろんモールなどの大規模開発では、人々が出会う場が作られたり、逆にメディアアトラボのようなメディア空間の大劇場が創出されていたり、こういった空間の再設定・再演出もありますが、とはいえ一方で、現在における新しいメディアの機能——それはメディアと現実の二重空間にもなっていると思いますが——を、どのように考えられているのか。これは、おそらくANTにも関わってくると思います。

あと、植田さんの議論では、モノや情報の集積の問題に焦点化されていますが、一方で、Saskia Sassenの言うような二重構造や外国人の問題など、情報化されにくい労働集約的なものは必ず都市に残るので、都市の一枚岩ではない構造みたいなものが植田さんの議論のなかでどうなる

のか、ちょっと聞いてみたかったと思います。

また植田さんは別の論文で、多くのディベロッパーが入ってくることで建築や設計の人たちのイニシアティブやコントロールが不分明化したり、誰が建築や設計を担うかということも不分明化したりしていくことを指摘されていて、それは上野さんが言われる不動産証券化によるリスクの増大や責任が不明確化していく構造とも呼応するものかと思われますが、そういったことが現在の都市にもたらす影響について、もしお考えになっていることがあるならお聞きしたいと思いました。

それから、午前の質問に出ていた地方の開発についてですが、たとえば、以前は豊橋にも西武や丸栄があったのですが、それも潰れて、本当に駅前はずばらく放置状態でした。豊橋の場合は、地元のヤマサちくわとインフラ企業の中部ガスがまちの開発を支えていて、結局放置されていた西武跡の駅前は中部ガス（サーラグループ）が開発しました。38万人の中核都市ともなると、こういった地元資本が再開発していくケースもあり、ちょっと東京とは違うような動きがあると思うのです。これまでは大都市の加速化する真似として語られていた地方都市の側に新たなリソースが発見され始めている今、そういった地方の動きについては、グローバル企業トヨタを抱える愛知県の特異性も含めてどのように思われるか、お聞きしたいと思いました。

平井さんのご報告もとても興味深かったのですが、ハームリダクションについて、福祉や医療の現場では、たとえば松本俊彦さんなどは薬物依存の問題においてどちらかというと（薬物の）「ダメ、ゼッタイ」に対して闘っている立場で、まだまだハームリダクション的実践の意味を日本などでは評価する可能性や必要性があるのではと気になりました。具体的に、たとえば、オープン・ダイアログ、ユマニチュード、ダルクなどには、治療に向かうなかでのポジティブな側面もあって、または従来の治療枠組みを変更する可能性もあって、それはハームリダクションの内部で終わっている部分とそれを超える部分の両方をもっているのかもしれませんが、そういった実践をこの枠組みの中でどう評価できるのかということが気になりました。むしろ実践の場面で、平井さんの議論がどういう意味を持つのか知りたかったところです。

仁平さんについては、ネオリベリズム下のボランティア論などの批判的分析がいつも見事だと思っていますが、今回はわりと類型分析になっていました。日本においては、一方で小泉や竹中、日本維新の会のような、すなわち撤退型・市場主義型と、もうひとつは安倍政権的な、これも撤退型の要素もなくはないけれど、小泉政権の後に撤退型の困難を厳罰主義や家族・国家などで埋める国家介入型と、2つのタイプがあるのかなと思います。後者の厳罰主義・国家主義的統治のほうは、仁平さんの定義ではネオリベリズムではないということになるのかもしれませんが、渋谷望さんや酒井隆史さんたちが最初に環境管理型権力によってネオリベリズムを紹介したときには、むしろリベリズムを統治として補完するものとして厳罰主義・国家主義的な管理的統治がくるということで、安倍政権はネオリベリズムに適合的だという議論をしていたかと思います。それこそがネオリベリズム論の生産性でもあったわけで、それは中国などの振る舞いをどのように見るかということとも関係していて、中国共産党は最もネオリベリズムに適合的だとする議論もあるかと思います。そういった観点を仁平さんはどのようにお考えなのか、お聞きしたいと思いました。

また、これも平井さんと同じように、現実の社会のあり方をどう分析・評価できるのかということについて、ネオリベリズムの指標だけで評価していくと、安倍政権のような非民主的な政権をどう評価するのか不分明になってしまわないか、お聞きしたいと思いました。民主党政権と安倍政権の差異について、たとえば安倍政権は民主党の子ども政策をまるまる真似して名前を変えるわけですが、同じものではありません。むしろ安倍政権では、政策は後退するわ

けです。また安倍政権の働き方改革は、たとえば残業規制の緩和や裁量制の推進に見られるように非常に危険です。ほぼ、労働法の内部からの解体です。女性政策も、竹信三恵子さんが批判しているように、「輝く女性政策」と男女共同参画政策は異なるものです。経済政策やリフレ派の立場からすると、今の左派の政策が緊縮・規制のほうに向いていて、それに対する稲葉振一郎さんたちの批判もあるとはいえ、一方で、統治に関わる言論の自由や言説の問題、民主主義の問題について、今の政権が持っている問題を見なくていいのだろうかということが気になりました。

私はウェーバー的にネオリベラリズムのイデオロギーに関心があり、Pierre Bourdieu の弟子の Luc Boltanski らの著書『資本主義の新たな精神』では——この本はフランスではベストセラーでしたが日本ではほとんど注目されていませんが——、最初のネオリベラリズムを牽引したのは1968年のイデオロギーだとしています。つまり、自由のシンボルの68年イデオロギーが、担い手のベビーブーマー世代も含めて、ネオリベラリズムを牽引したとするのがヨーロッパでは中心の議論になっています。ただし日本では、小熊さんの議論への批判なども含めて、これは特に当事者世代が否認する点ですが、で、個人に焦点を置くのか組織に焦点を置くのか、行き過ぎると逆の方へと振り子のように行き来するイデオロギーの歴史の変遷は現在もう限界に来ており、組織や社会を構成できなくなっており、イデオロギーの危機がやってきているとし、それは同時に資本主義の危機でもあると指摘しています。それは主体の危機でもあります。

日本の場合、仁平さんがおっしゃるように撤退型と侵攻型の両方が一緒にやってきているかもしれないので、だとするとイデオロギーもより複雑ですが、ハームリダクションもそういった観点のなかで考えられるかもしれません。たしかに、SDGs も地域主義も、今新しく見られる様々なイデオロギーは、1968年型のネオリベラリズムを牽引してきたイデオロギーと違って、さらに新しい資本主義を牽引するイデオロギーという側面もなくはないかもしれなくて、この「資本主義の新たな精神」みたいなものを、資本主義の維持の問題として、ネオリベラリズムの生き残りとするのか、もっと怖いものの牽引役とするのか。私は精神分析研究もやっているのでも、イデオロギーのもつ「移行対象」という言い方をしますが、そのイデオロギーによってむしろ変更が促進されていく機能を見えています。

フランスではまた、社会学者の Christian Laval と哲学者の Pierre Dardot が2009年に出版した『世界の新しい理性 (La nouvelle raison du monde)』という著書があり、ネオリベラリズムのイデオロギー、特に統治の観点について批判的に分析していますが、統治論は Michel Foucault ではなく精神分析の議論にほぼ準拠して、精神分析の議論による分析を詳しく紹介しています。リベラリズムの進化としてのネオリベラリズムという把握だと、日本にはネオリベラリズムは来ていないという議論になりがちですが、ネオリベラリズムを、リベラリズムの失敗に対する古典的リベラリズムへの純正回帰ではなく、リベラリズムの危機に対してそれを回避しようとする新たな展開であり、市場において国家の介入を制限する自然の法の体現ではなくて、むしろ積極的な政府の介入のもとでリベラリズムをサバイブさせる、全く新しい世界の構築だとしているのです。フランスでは、社会と主体の保全がネオリベラリズム批判や対抗において語られていますが、「世界の新しい理性」とは、この全く新しい世界の作り変えの思想を指しています。仁平さんや平井さんの批判するような、競争的關係・能力至上主義の主体の決定的な構成としてのネオリベラリズムを指摘し、その批判を宣言しています。ネオリベラリズムについては、むしろ思想と統治の、哲学の闘いなんだと言っているわけです。これは Bourdieu も言っていたかもしれません。仁平さんや平井さんの言う、怠惰の権利、何もしない権利、それでいて存在が肯定される権利などは、積極的に思想として議論していくべきものだと思います。そ

ここでは、ネオリベリズムの主体統治の危険性を指摘しており、主体と社会の破壊、創造的破壊ではなく決定的な破壊、修復不能な破壊を生む可能性を指摘しています。なので、日本の開発主義的保守とは違った、社会民主主義的な保守思想があり、今日では環境保全の議論などもつながっているのですが、それは日本ではあまり見られないものかと思います。Foucault 的な統治論だけでない、批判的なネオリベリズム理論の可能性はまだまだある気がします。

文 献

Boltanski, Luc et Ève Chiapello, 1999, *Le nouvel esprit du capitalisme*, Paris: Gallimard. (=2013, 三浦直希・海老塚明・川野英二・白鳥義彦・須田文明・立見淳哉訳『資本主義の新たな精神(上・下)』ナカニシヤ出版.)

Dardot Pierre et Christian Laval, 2009, *La nouvelle raison du monde: Essai sur la société néolibérale*, Paris: La Découverte.

上野淳子, 2010, 「東京の「世界都市」化戦略と政治改革——開発主義国家がネオリベラル化するとき」『日本都市社会学会年報』28 : 201-17.